わが師わが友(その2) —中欧 10 人—

岡村 誠 三*

中部欧州をドイツ、フランス、スイス3カ国に限って
みても高分子や放射線の範囲で10人にしぼるのはなかな
なむずかしい。まず高分子といえぱなんといっても
Staudinger 大先生と Kern, Schulz 両先生。大先生に
は1955年に初めて Zürich でお目にかかり深々とお辞
儀をいただいて感激した覚えがある。学生時代には文献
にしばしば出てくる M. Staudinger を Muscow などと
かってにあて字を入れて冷やかしたりして、Magda 夫
人にも Hermann 大先生にもたいへん失礼した次第。
今ではノーベル受賞記念講演や著書「有機化学から高
分子への道」中の文章など試験問題にまで借用してい
へんお世話になっている。また Kern 先生のところの
Jaacks は最近正教授になってますますはりきっている
らしい(校正のときエベレスト遭難の報が入った。ご冥
福を祈りたい)。彼はわれわれの研究室に3月ばかり滞
在していた。Schulz の名は雑誌会などで早くから覚え
てしまった人の一人である。実は Husemann 女史との
共著があまりにも多いので、学生仲間の推理小説の種に
なったりしたものである。Husemann とは先年会って
ドイツのえらい女の人の典型かと感心した。写真は1955
年の Zürich のもので、感じが同志社大の野間教授
に似て上品な紳士としての Schulz がよく出ていると思
われませんか? ある時期に偶然、祖父江寛先生と筆者
と Schulz と3人が溶液重合の溶媒効果とか、乳化重合
の低温効果とかでぶつかったことがあった。Schulz は
その後 Flory と同じように分別などから専門の範囲が
どんどん広がり、またわれわれの方は放射線などへ変わ
って行った。それでも IUPAC で同じ国際委員を勤め
たりして毎年のように顔を合わせている。帝人の下間昌
君が Mainz に留学した。

次に放射線関係にはまず Hahn-Meitner Institut の
Henglein をあげねばなるまい。初めは高分子から入っ
たが最近ではすっかり足を洗い、もっぱら放射線化学、
特に基礎過程に熱心である。彼とは結婚の前年に Berlin

で会い、新婚旅行となった来日の手伝い、翌々年子供の
誕生日に Berlin で家庭訪問をしたわけであるから、日
本流にいえばこっちに頭があがらないはずであろう。ド
イツ流ではどうなのか? 彼のところへ行かれた京大の
役助教授や東洋紡の小林義男博士に伺ってみたい。今年
から始まった、共同利用研究所の客員外人教授として、
1月20日から Henglein が京大の原子炉実験所へ3カ
月の予定でこられる。各大学の歴訪が予定にあるので、
ご希望あればご連絡願いたい。昨秋の日本アイソトープ
会議には Henglein と同じ研究所の Schnabel と、Mün-
chen 大学の Heusinger が参加された。Heusinger は
München 大学の原子力研究所におり、放射線高分子化
学にたいへんな熱の入れよう。この研究所には5MW.
の軽水炉があり、München から数十キロの遠隔地にあ
るなど、筆者のいまいる熊取にたいへん似ている。ポリ
マーの放射線橋かけ反応にカチオン機構の考えを導入し
ている点は、いま筆者の考えているポリマーのイオン分
解と同じポイントであって偶然の一致であるが、万事に
意気投合できる。当分話題にこと欠かないので楽しみに
している。

南へ下がってスイスに入ると Staudinger のお弟子
さんも多いようだ。CIBA の Batzer や Bern 大学の
Signer など。Signer はいかにも思慮深そうなアゴヒ
ゲをたくわえ、東洋哲学の話が飯より好きらしい。夏の
間1カ月ぐらい徴兵訓練が励行されているスイスの家庭

Henglein 夫妻

* Seizo OKAMURA 京都大学(工学部高分子化学科・
606 京都市左京区吉田本町)教授・工博

Magat 夫妻をかこんで

風景。Bern 郊外の宅でローソクの灯の下、物静かな夫人と一緒に禅の話を夢中であった……そのさなか……ぱたぱたと飛び込んできた次男の Thomas 君が「兵隊とはなんとひもじいものだ」と叫んで、大笑いのうちに東洋哲学の幕が下りた。スイスでも会社の重役で大学教授兼務がよくある。Lonza 社の Stirnemann もその一人。彼の姉が Einstein と同級で小学校で国語を教えていたというのが自慢話の一つ。Zermatt の氷河の上を一緒に歩きながら、この中に溶け込んだホルマリンが宇宙線でポリオキシメチレンに重合しているかも、などと話し合った思い出がある。彼の推薦もあり京大化研の小林英一君は Signer 研究室へ留学してポリオキシメチレンの分別の仕事をした。小林君との交換の意味で Bern 大学の Moser 君が京大へ1年間きていた。新婚の夫人を伴って東洋紡の堅田の寮を拝借して結構楽しんで帰ったようだ。またスウェーデン原研との間では三菱油化の清水晃君と京大の志賀哲雄君が留学し、交換として1年前に Gilbro 君が、現在 von Euler 君がともに京大に滞在している。これからもどんどん交換の機会がふえよう。経団連では最近日瑞交換がスタートし、学振では日英交換が昨年、また日独交換も始まろうとしている。

フランスの高分子では Sigwalt がいちばん親しい。

夫人が東洋出身のため、皆の知らない間にちょくちょく来日されているようでもある。環状オキサイド、サルファイドの重合でわが国とも近い。

放射線関係ではなんといっても大御所は Magat と Haissinsky である。Magat 研や Chapiro 研はきれいなお嬢さんの多い研究室としても世界的である。Magat 夫人も美しい研究同僚である。パイプを片手に2時間以上もかかる中食のときに、レストランで聞く Magat の放射線化学は研究発表より数段おもしろい。最近すっかり高分子化学から離れ、もっぱら励起状態の活用を考えている由で、化学に新風が吹き込むものと期待したい。ここへは北大の林教授がしばらくおられた。最近 Durup が正教授になった由。ここには京大の山岡助教授が1年間いた。

Durup や Jaacks が若い教授として活躍する欧州の空気を見、聞きするにつけても、わが国の若返りを早くなんとか思うことしきり。フランス放射線化学の正統派はやはり Haissinsky であろう。slow but steady の感じで、教師をしていられる物静かな夫人やあたたかい人柄の長男にかこまれて停年を迎えられた先生のご健康を祈ってこの回を終わりたい。

Schulz

Signer